

5. 資源管理型漁業の推進（モニタリング調査）

5 - 1. 沖合底魚資源動向調査

石原 幸雄

目的

沖合底魚資源の持続的利用と沖合底びき網漁業の経営安定に資するため、山陰沖における有用資源の資源動向を把握する。

方法

鳥取県の沖合底びき網漁船が所属する地区(賀露、網代、田後)の漁獲月報及び漁船勢力を集計し、漁獲の変動を把握した。

結果

2007年の本県沖合底引網の地区別漁獲量、金額を集計し、図1に示した。

賀露

総漁獲量は1,807tで、3地区内で最も少なく、その内訳はアカガレイ23%、ハタハタ20%、ソウハチ18%及びズワイガニ16%で、この4魚種が漁獲の約8割を占めている。また、漁獲金額は12.1億円であったが、そのうちズワイガニが46%を占め、以下ハタハタ、アカガレイともに14%、ソウハチ11%となっている。

網代

総漁獲量は1,978tでアカガレイが31%、ズワイガニが27%、次いでハタハタが24%でこの3魚種が漁獲の約8割となっている。また、総漁獲金額は14.7億円で、そのうち48%はズワイガニで以下、アカガレイ28%、ハタハタ13%となっており、他の2地区に比べ、アカガレイの割合が高い。

田後

総漁獲量は2,759tでその内訳はズワイガニ21%、ソウハチ19%、ハタハタ14%であった。その他にアカガレイ、ヒレグロ、エビ類を漁獲しており、その他の魚種の占める割合も高く、他の2地区に比べ多様な魚種を漁獲していることが判る。一方、漁獲金額ではズワイガニの割合が49%を占め、他の地区同様、非常に高い割合を占めている。しかし、それ以外の魚種については全体の1割強以上を占める魚種はない状態である。

合計

特に3月～5月にかけてハタハタの漁獲が不調であったため、アカガレイへの漁獲努力が増加

した結果、2006年に比べ、2007年はハタハタの割合が大きく減少(33.19%)し、逆にアカガレイの割合が増加(13.20%)した。

次に、地区別に魚種別漁獲量、金額の年推移を図2に示した。

賀露

1980年前後に2,000tから2,500tを漁獲していたが、その後減少し、2004年には1,430tまで落ち込んだが、ハタハタの漁獲量の増加等により、2006年は1,995tとなった。また、漁獲金額は1990年代前後が最も高く、1986年及び1991年に21億円を揚げている。しかし、その後は減少傾向にあり、2005年は10.9億円にまで減少した。2007年はハタハタの金額減少があったものの親がにの金額増加等により、2006年を上回る12.1億円の水揚げとなった。

網代

漁獲量は1981年の2,319tをピークに減少し、1986年には1,256tまで落ち込んだが、その後は増加傾向にあり、2007年は1,978tであった。一方、漁獲金額は賀露と同様に1990年前後が高く、1991年には21.3億円を水揚げしている。しかし、その後は減少傾向にあり、2004年には12.6億円にまで減少した。2007年はハタハタの金額減少があったものの親がに、松葉がにの金額増加により、2006年を上回る14.7億円の水揚げとなった。

田後

漁獲量は1990年前後がもっとも低く、1985年には1,254tまで落ち込んだ。その後は増加傾向にあり、2005年以降概ね、3,000t程度の漁獲で推移していたが、2006年はやや下がり、2,759tとなった。一方、金額は統計を取り始めた1975年以降増加傾向にあり、近年は、20億円程度で推移している。2007年は親がに及びハタハタの金額減少があったものの松葉がに、アカガレイ、ソウハチの金額増加により、2006年を若干下回る20.3億円の水揚げとなった。

合計

3地区を合計した総漁獲量は6,543t(前年比94%)、総漁獲金額は47.1億円(前年比約102%)であった。

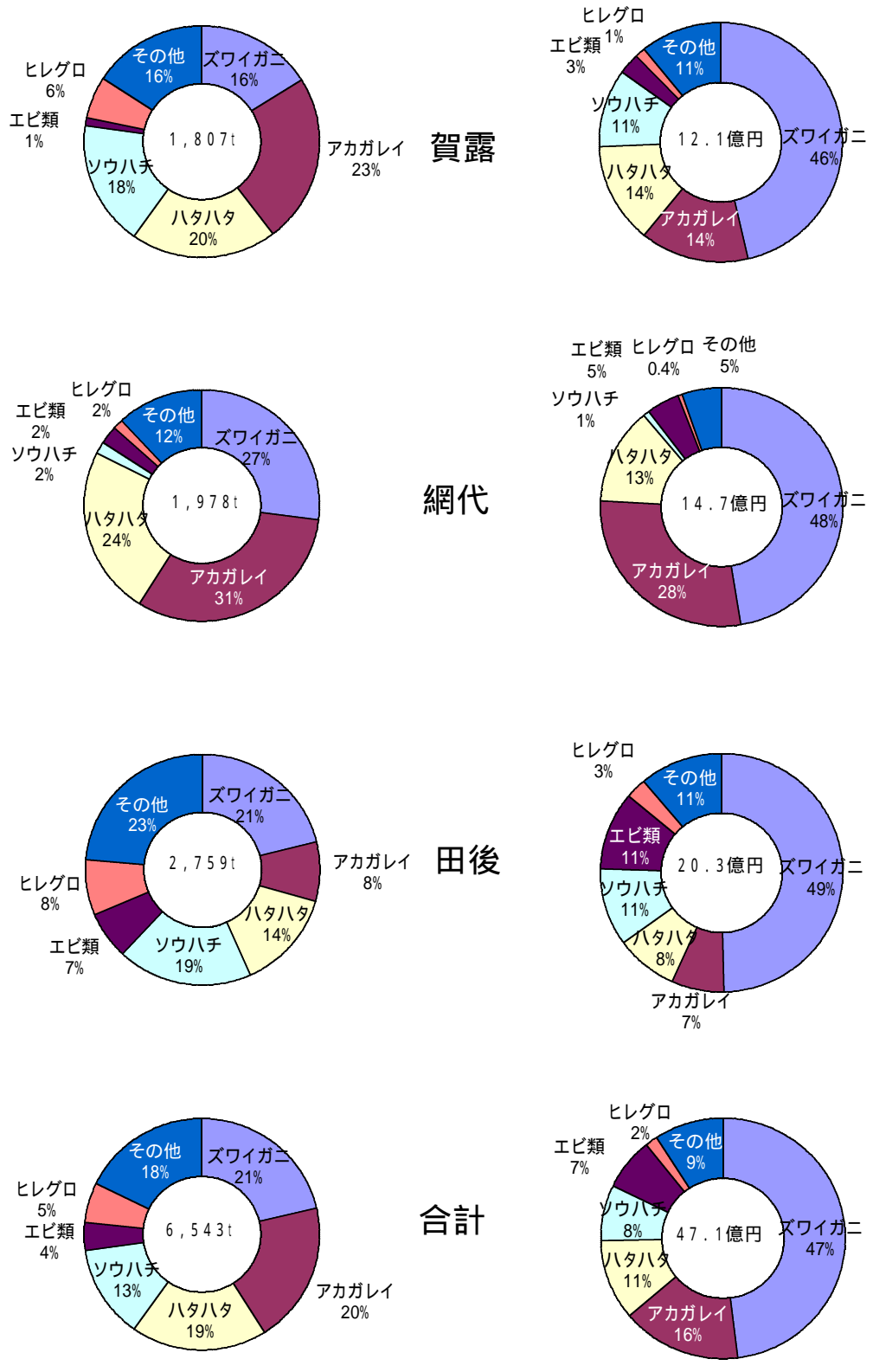


図1 地区別魚種別漁獲量,金額(2007年)

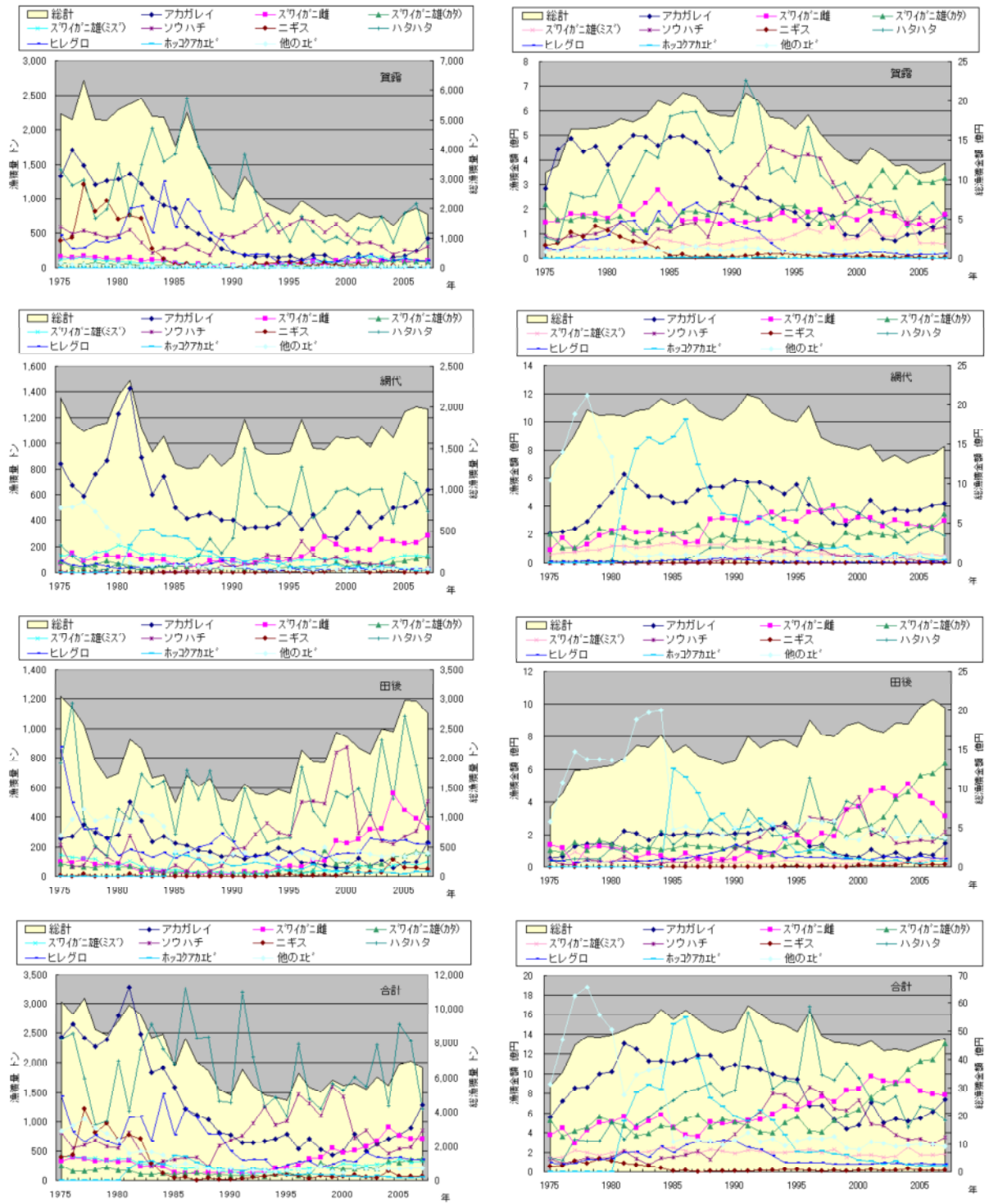


図2 地区別魚種別漁獲量,金額の年推移